3B-29

れまほ

特54
656

特54 - 656
1200500912362

賞

花の巻

267
643

東京 學海指針社 發行

楠木正行幼時の遊戯

45. 3. 15
内交

はしがき

緒言

一兒童教育の一方便として、學年末に或は運動會に或は學藝會に或は展覽會に或は平素に於て、賞與品を授け以て兒童を奬勵鼓舞することは、到る處の小學校に於て實行せられ、又大に必要缺くべからざることなりと雖も、未だかつてこれに適切なる資料に接することを得ざるは大に遺憾とする所なり、本書は古來我國に於て榮譽を荷ひたる人物の傳記を簡單に列擧せるを以て、兒童一時の名譽を表彰するのみならず、將來永遠に紀念物として保存し自己は勿論子孫に

至るまで、永久に其の價値を失はざらしめんことに努めしを以て特徴とせり。

二表紙の『しかくにあきし部分』あり、其の處に學校印を押捺して授與し、終りの頁に於ける各欄即ち學校長名、受持訓導名、受賞者の學年及住所氏各及び月日は受賞の後各自に記入すべきことゝなせり。

はまれ（花の巻）

目次

一　學校長の訓話……一
二　天照大神……三
三　神功皇后……六
四　中將姫……一〇
五　小督局……一三
六　橘妙子……一七
七　楠木阿久女……二〇
八　山内一豐の妻……二四
九　袈裟御前……二八

目次

一〇　巴御前……三一
一一　靜御前……三五
一二　北政所……三九
一三　加賀千代女……四三
一四　春日局……四七
一五　原總右衞門の妻……五〇
一六　紅蘭女史……五三

目次終

ほまれ（花の巻）

一　學校長の訓話

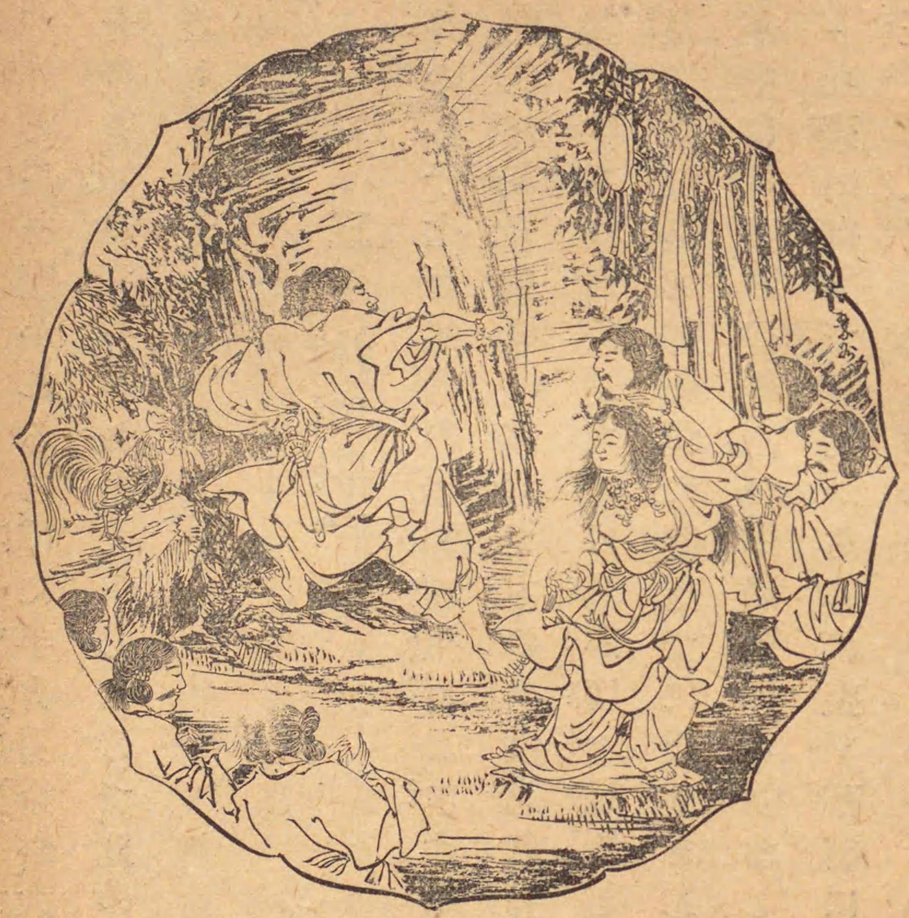
諸子よ諸子は何時になく今日は笑顔でありますな、一人二人ではなく此處に御集りの諸子は殘らず愉快さうに見えます。否な愉快さうどころではなく全く眞に愉快に見えます、私は元より先生方は云ふまでもなく、來賓の方々まで愉快でゐらっしやるやうです。實に本校内に在るもの動いて居るもの動かないもの、校舍も机も器械も、植物園の草木も皆ニコニコ笑って居るやうな感じが致すではありませんか。何故でせう。此の愉快が一時に此處に湧き出たのでせうか。突然起った現象でせうか。否々これ

は私が申すまでもなく、諸子の平素の勤勉の結果です。苦心慘憺した賜物です。諸子は今日月の桂を手折ることが出來たのです、龍の頷の珠を取ることが出來たのです、これが愉快でなくて他に愉快の事がありませうか。併しながら勝って冑の緒をしめよと云ふことがあります、小成に安んずるなと云ふことがあります、將來に於ては尚一層智を磨き、德を修め、體を練り、此の發展しつゝある大日本帝國を立派に荷ふことが出來得る國民とならなければなりません。そこで只今差上げました「譽」なる賞品は今日諸子が成効した紀念物であって、又將來に於ける指針となるべき物でありますから、朝に夕に熟讀し敢て古人に耻ぢざらんことを心掛けらるゝ樣に希望致す次第であります。

二　天照大神

皇太神宮は伊勢國にありまして、天皇陛下の御先祖天照大神樣を御祭り申した所でありますから、日本國民は一生に一度は是非參拜しなければなりません。此の大神樣の御弟に素盞嗚尊といふ、大層亂暴な神樣がありまして、大神が作って置いた田を踏み荒したり、河をうめたり、田の中に竹の串をさしたり、神樣の祭ってある御宮に小便をしたり、あるとあらゆる亂暴を致しました、けれども姉の神樣は別段御叱言もおっしやいませんでした。それですから益々いたづらがつのって、何處からか斑の馬を牽ゐて來て、其の皮を臀の方から引きむき赤裸にして、大神が衣物を織って居らるゝ部屋の窓から投げました。流石に溫順しい大

神様でも、此の亂暴には驚かれて岩屋の中へ御隱れになってしまひました。太陽の様に光って居られた大神様が御隱れになったものですから、まるで眞闇夜になりました。そこで八百萬神様は大へん困りましたゆゑ、天安河原といふ所に集まって相談をしましたが、岩屋から御出し申す良い手段を考へ出したものは一人もありません。思案してゐるうちに一ばん考の深い思兼神の申さるゝには、これは普通大抵の事ではおでましにはならない、まづ私の云ふ通りにするがよいとて、八咫鏡と八阪瓊勾玉と御幣とを造らせ、天香山に生へてゐる榊を引き拔いて來て、其の上の枝に八阪瓊勾玉を懸け、中の枝に八咫鏡を掛け、一番下の枝に御幣を結びつけて、此に仕度が殘らず出來上りましたので、岩戸の前に燎火を焚き、天鈿女命と云ふ美しい女の神様が仕度をなされて、茅纏矛を持って舞を初められました。すると其れへ集まって居られた大勢の神様が一度にワイワイと音樂を奏でゝ面白く囃し立てたものですから、岩屋の中に居られた大神様は、如何にも面白さうな樣子であるの



で、秘と戸を開かれると、直に手力男命が、大力を出して岩屋の戸を開き、大神を外へお出し申したので、此の世の中は再び明るくなりました。

三　神功皇后

今から千七百年計の昔神功皇后と申す御方がありました。第十四代仲哀天皇様の御后で本の名は息氣長足姫と申されました其の頃熊襲と云ふ九州の賊が度々謀叛しましたゆゑ、仲哀天皇様は御自身で御征伐に御出でになりましたが、御不幸にも御出征中に筑紫の香椎宮で御崩御になりました。處が皇后様は男優りな豪い御方でしたから其の喪を秘密にし、如何かして熊襲を征伐し人民を安堵せしめようと心を千々に碎かれました。其の

前まだ天皇様が御丈夫でゐらっしやる頃、或る晩のこと神様が皇后様のお枕許に御立ちになって「熊襲が叛くのは全く新羅國が後押をするのだによって先づ新羅を討つがよい」と仰せられました。皇后様は御夢が醒めてから天皇様に神の御告げを申上げましたけれども御信じになりませんゆゑ、一旦は思ひ止まりましたけれども、之れはどうしても新羅を征伐せねばならぬと思召して、武内宿禰と御相談なされ其の御用意をなされました先づ小山田村で神様を御祭りになって、無事に新羅を討つことが出來る樣にと御祈りをなされ、其の近所の川で釣をなされて「若し今魚が釣れたならば今度の征伐に勝ちを得るし萬一釣れなかったならば負ること」と仰せられ、暫くして竿を御揚げになると見事な鮎が一匹釣れました。大層御喜びになって、之れなら

ば屹度勝つに相違ないと群臣も一同大に勇み立ちました。愈々和珥津から船出することになりましたが、今出發と云ふ時に又々神様に御祈になって「新羅に勝つことが出來るならば、吾が髪が別れて二つになれ」と仰せられて海の水へ御頭を御浸しになりました。すると不審議にも御頭の髪の毛が眞二つに別れましたので、之をみづらに

結び直樣男裝を致しました。臣共は前の魚釣と云ひ今の髪洗ひと云ひ御ト占のままになりましたものですから、益々勇氣が出ました。そこで皇后の御軍は元氣よく海を渡って新羅の港に着きました。新羅とは現今の朝鮮のことで其頃は三韓と申したのであります。敵國では不意に澤山な兵士が攻め寄せて來たものですから、上へ下へと大騒ぎ皆狼狽して唯泣き亂るゝばかりでありました。國王は皇后樣の雄々しい御裝を見て大に恐れ、手向ひをするどころではありません、直樣皇后の前に兩手をつき頭を下げて降參し「今迄は惡うございました是からはたとへ西から太陽が出ようが、鴨綠江が逆に流れることがあらうが決して叛きません、そして年々貢物を奉ります」と詫びましたゆゑ、皇后樣は御許しになり一人の大將を留めて國を守らせて目出度凱

旋せられました。其の後新羅の隣國の任那や高麗等皆我國に屬しました。それで前に叛いた熊襲は絲の切れた紙鳶の如く、以前の力は全く失ひ、戰はないで悉く平らげることが出來ました。

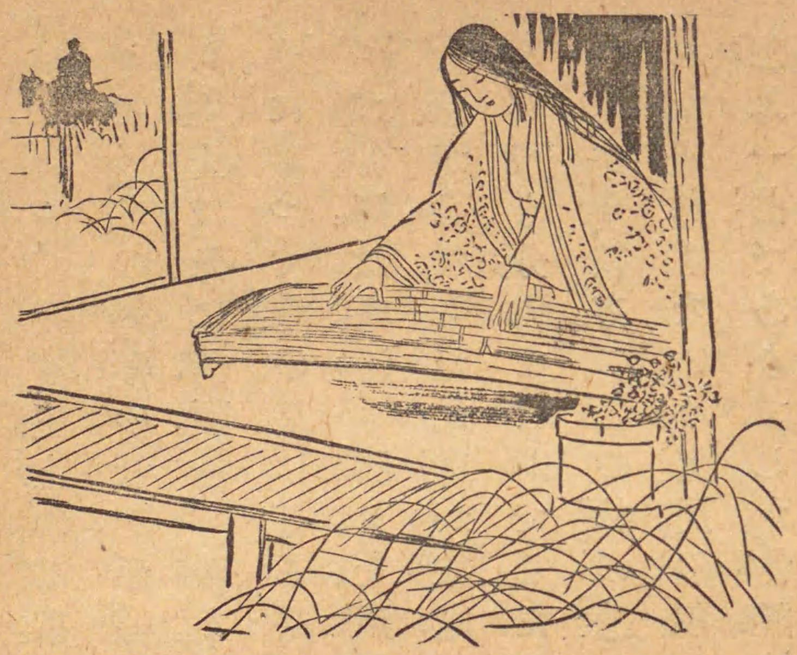
四　中將姫

聖武天皇の御代横佩の右大臣藤原豐成卿の娘に、中將姫と申す御方がありました。母は紫の前と云ひ一人の御子樣ですから、此の上もなく可愛がって育てゝ居ますと、此の子がなかなか才智に富み、孝行の心が深く、其の上容貌が並勝れて美しいものですから、父母も寶珠の玉の樣に大切にして育てました。ところが姫が五歳の時母の紫の前は不斗病氣に罹りましたゆゑ、あらゆる手當を盡しましたが其の甲斐もなく次第に重くなって、今は迚も癒る見込みが立たなくなりました。其の時に母は姫を枕頭に呼んで「妾の命は到底助からないが私の無い後に御父樣は後妻を娶とられても御前は私だと思って能く事へねばならぬよ」と諭して、遂ひに死んでしまひました。姫をはじめ一家の者は嘆き悲みましたが、最早致し方がありませんから厚く葬むりました。其の後ち豐成卿は他人の勸めにより止を得ず、左大臣橘諸房卿の女照日前と云ふ後妻を娶りました。此の照日前は姫を實の子のやうに可

愛がり、姫も實母が臨終の時の教を守り能く事へましたが、姫が十歳の時後妻は豐麿と云ふ男の兒を生みました。これからは以前とは打って變って姫を邪慳にして、豐成卿の留守の時には箸の上げ下しに口汚く叱りつけ生疵の絶えたことはなかったのですが、姫は如何なる憂目にあっても父に知らせたなら、却て餘計な心配をかけることゝ思って、我慢に我慢をし獨りで心を傷めて居りましたが、最早是とて樂みがありませんですから、お經を誦むことを習ひ、實の母の位牌の前で其の御經を誦むのを何よりの樂みとして居りました。然るに鬼の樣な照日前は嘉平太と云ふ惡者に賴んで姫を草臭峠まで盜み出さして殺させようとしましたが、姫は嘉平太に向ひ「私は迚も助かる身ではないから臨終の際に、せめて今一度御經を誦みたいから暫くの間待って御吳れ」と賴んで御經を誦んで居ますと、流石の惡人嘉平太も、其の心のやさしいのに感じて、心をサラリと入れ變へ、これより姫を雲雀山の己が住家に連れて行って、人知れず匿して置き、照日前には姫の片袖を持行き殺した風にして置きましたが、其の後豐成卿は不斗雲雀山へ狩に行かれた時、姫に邂逅ひ、仔細を聞いて始めて事の眞相を知り、驚いて姫を連れ歸りましたら、照日前は家に居っても心が責めるものですから、實家へ逃げ歸って狂死を致しました。そこで姫は益々世を果敢なく思ひ強て父に願って當麻寺に入りて尼となり、善心尼と稱へ佛の助けにより、蓮の絲で蔓陀羅を織り多くの人に敬はれました。

五　小督局

小督局は權中納言藤原成範卿の息女で高倉天皇樣に仕へた方でありまず。琴を彈するのに妙を得、且つ世に稀なる美人の上に、性質が溫和でありましたゆゑ、宮中に召されてより天皇の御寵愛は日一日と深くなりました。併し之れに反して日に日に御寵愛の薄らぐのは中宮建禮門院でありました。此の建禮門院は當時飛ぶ鳥を落す程權勢のあった、平清盛の女でありまず。清盛は我が女がだん〳〵冷遇されることを聞いたものですから、如何にかして小督を無きものにして、娘の寵愛を輓回したいと種々工夫を廻らして居りました。これを悟りました小督は、吾が身の爲め主上にまで御迷惑をかけるに忍びないとて、或る夜陰に脫れ出で行衞知れずになりました。之を聞いた清盛は大に悅びましたが、獨り心を痛められたのは主上でありました。深夜にか、



はらず主上は御寢殿を出でさせられ、獨り三五の月を眺めながら小督の事のみ思ひなやみつ、あった時に、御前近く參った者がありました。主上は「誰なるぞ」と申されましたゆゑ「守衞の宿直源仲國です」と答へますと「オ、仲國汝に問ひたき事こそあれ汝小督の行衞を知らずや」と仰せられましたゆゑ「下臈の身によって承知致す筈はございません、併しいつぞや小督殿に召され笛もて琴の御琴の音は何れに聞きましても能相手を仕りましたゆゑ、仲國御

く覺えて居ります。今宵は十五夜にて隈なく月も輝いて居りますによって、必ず主上の御事を偲ばせ給ひ、御調べなすって御出でせう。其の御琴の音を手賴に尋ねて見ませう」と申上げましたら、主上は急に御顏色も晴々しくなられて「然らば余が親書を渡すによって、寮の馬に打ち乘り急ぎ參れ」と仰せられましたにより、仲國は露滋き路芝を蹶散らして嵯峨の奥の邊を指して馬を急がせました。此處か彼處かと柴折戸を尋ねて見ましたが、どうしても分りませんでしたから如何しようかと思案に暮れて居ますと、彼方の松の林の邊から風のまに〳〵琴の音が聞えました。紛れもない小督局の琴の調べ而も腸を斷たるゝ樣な夫を想ふ一曲でありました。仲國は門の戸をホトホトと叩いて、宮中より迎に參ったことを申入れ、御親書を御渡しになると、局は御

書を押頂き披見されましたが、唯之れを顏に押當てゝ泣かるゝばかりでした。仲國は從者を局の側に殘し置き急いで宮中へ馳せ歸りますれば、主上は未だ御寢殿にも入り給はずして待って居られましたによって、直樣輦を用意して嵯峨に引き返し局を御連れ申しました。素より清盛に悟られては一大事ですから、窃に宮中に入れて誰にも氣附かれないやうに忍ばせられました、所が入道は之れを嗅ぎ附け强て清閑寺へ送って御髮を落させました、時に御年は僅に二十三歳でありました、心にも無き黑染の尼姿と變られた局の胸中の悲痛は如何ばかりであったでせう。

六　橘妙子

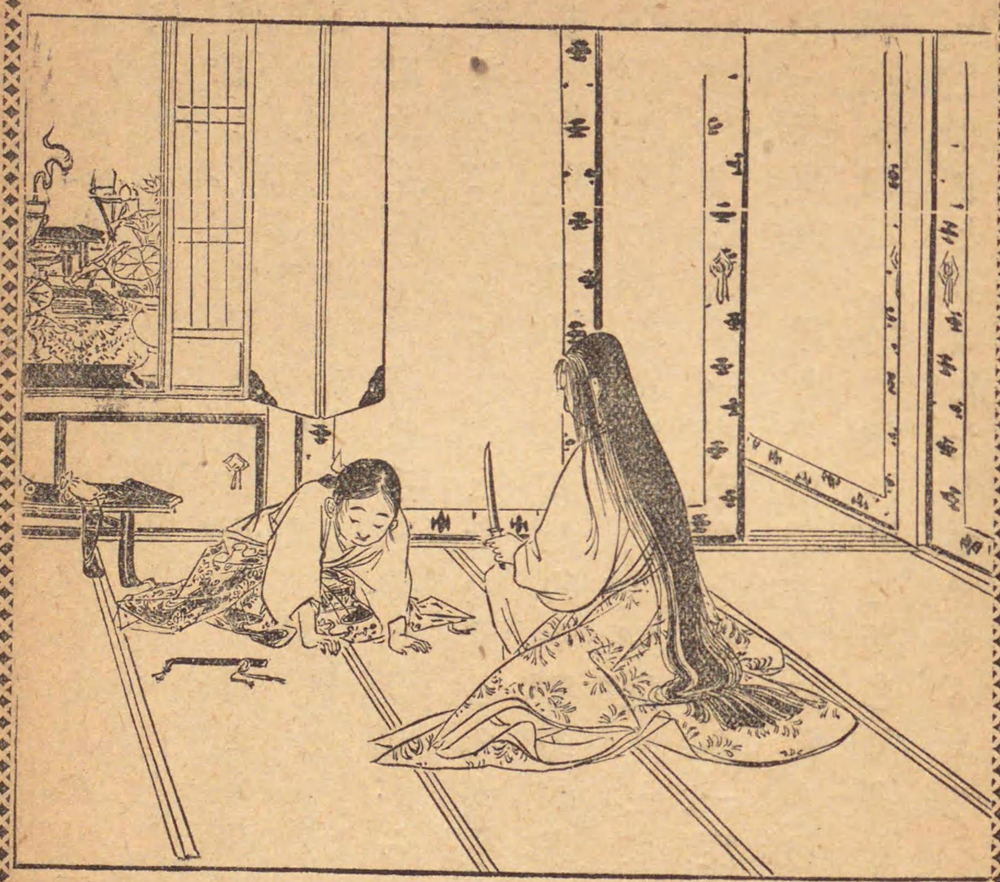
今から千餘年の昔仁明天皇樣の御代に但馬守橘逸勢といふ人がありました、此御方は學問世に勝れ殊に書道に妙を得た人でありましたが、他人の爲めに寃罪を蒙つて伊豆國へ流さるゝ身となりました、愈々流さるゝ日となりますと、別れを惜む人々は其の家を訪ひ何くれとなく慰め、共に涙にむせびましたが、其の中にも殊に哀れを極めたのは妙子と云ふ逸勢の女でありました、妙子は今年十六歳で日頃孝心深いものでありましたから、今しも懷しい父上に別れる事が如何にも情けなく悲しくて堪りませんゆゑ、父上と共に何處までも一緒に行きたいと思ひましたが、父は罪人の身でどうすることも出來ません、そこでそつと我が家を脱け出で、晝は人目を忍び慣れぬ旅路を夜歩み、遙々と遠江國まで後を追ふて參りました時、不幸にも父は重い病氣に

罹られたと云ふことを聞き、妙子の悲しみは一通りではありません、遂に役人の許しを得て父の側に參り、夜の目も眠らず看病致しましたが、妙子の心盡しも其の甲斐なく父の病は益々重く、あはれ遠江國の假の宿で死なられてしまひました、後に殘つた妙子は餘りの悲さに心も狂うばかりに泣き崩れましたが、漸く氣を落ち附け涙ながらに父の死骸を程近き丘に葬り、自分は綠の黑髪を惜し氣もなく根元より切り落して尼法師となり、墓の傍に小やかなる庵を作りて朝夕讀經に怠りなく、父の追善を致しました、されば此の土地の人々は此の狀を見て何れも哀れと思はぬものとてなく、其話しをして相互に泣く位でありました、斯く十年の間一日の如く墓の守をして、亡き父の靈に孝養を盡して居りましたが、父の潔白であつたことゝ妙子の孝心深いの

に神も感じたのでありませうか、嘉祥三年に朝廷は逸勢の罪を赦し、更に正五位下を贈られましたから、妙子の喜びは一方ではありません、直に遺骨を携へて京都に上り菩提寺に葬り、猶も冥福を祈りました。

七　楠木阿久女

楠木阿久女は正成公の夫人であります、正成勤王の爲めに盡すに當り年三十歳を越へて未だ獨身でありましたゆゑ、是れ幸と藤原藤房が藤原宜房卿の女を娶はしました是れ卽ち阿久女でありますが、學識もあり才氣もあり、當時京都に於て有名な姫君であられたのですから、正成の奥方となってからは、家庭に於ける一切の事を引受け、殊に子供の教育に熱心でありました、正成は



七　楠木阿久女

一族郎黨を提げて遠く朝敵尊氏と戰ひ、屢々奇計を廻らして大に之れを苦しめましたが、戰運拙なく延元元年五月二十五日遂に湊川に戰死致しました、逆賊ながらも尊氏は正成の首を河内に贈り屆けましたによって阿久女は、悲嘆の涙にかき暮れなが

ら追善に心を盡して居りました。此の時正行はつと起つて佛間に入りましたゆゑ、母は其擧動が何となく怪いゆゑ、後から行つて窃と覗いて見ますと、正行は父より袂別の際に、片身に授けられた、短刀を拔き放つて、方に割腹しやうとして居る處でしたゆゑ、母は駈込んで其の手を押へ、涙ながらに「御身は如何したものぞ、なぜに早まつたことをなさるのか、櫻井驛で父君に御別れ申した時の御言葉を忘れたのか、御身が家に歸つて此の母に何と物語りをなされたか、父は武運拙くして戰場の露と消へ給ふとも、御身は生殘り一族郎黨を養ひ、今一度兵を擧げて朝敵を亡ぼし、一天萬乘の君を泰山の安きに置き、叡慮を慰め奉れと父君が御敎へ下されたと、此の母に話し、御身も父君の遺訓を守り、朝敵を亡ぼすと誓はれたのではないか、然るに今此有樣は何事です、御身は朝敵の首を討つべき刀を以て自害し果てたならば誰が代つて朝敵を亡し、叡慮を安じ奉るものぞ、今御身死して地下の父上にどの顏を以て見えることが出來るぞ、心狂ひての事か、御身父の子ならば此の位の道理の分らぬ事もあるまい」と、熱き涙を流して訓誡しました、正行は大に之を悔い、これよりは日常も遊戯も戰爭遊びのみに耽り、巧妙な謀を廻らして敵の首を斬るとか、敵の城を攻落したとか、寸時も朝敵を亡ぼすことは念頭を去りません、母も大に悅び益々其の躾方に精力を盡しました、正行二十三歳の時一族郎黨を率ゐ四條畷に於て、尊氏の大軍を引き受けましたが、哀れや戰場の白露と消えられたのは、返す〳〵も殘念でありました。

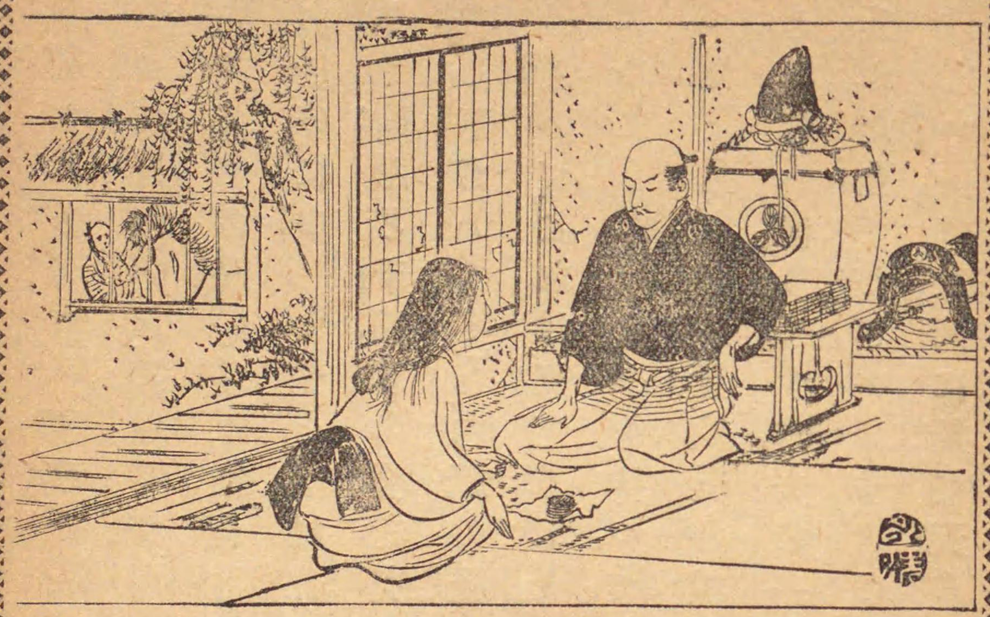
阿久女は後髪を落して、河内國甘南備郷に庵を作り、楠氏一族の

冥福を祈り、正平十九年七月に歿しました、今を距ること實に五百五十年の昔であります。

八　山内一豐の妻

山内一豐は織田信長の臣で、祿三百石を頂いて居りました、家が貧しかったものですから、人々が賤んで交際をするものは少かったですが、聊も之れを意としません、自分は貧しきを以て心配とも思ひませんでした、妻も夫の心と同じく貞操を守り、垢つき弊れたる衣を身に纏っても羞る色もなく、只管夫を敬ひました。

或る日のこと大そう良い馬を賣りに來たものがありました、見れば黑河毛にて今油を布き流した樣な毛色、丈は八寸にあまり尾もあくまで総やかに、左右の耳は竹を批ぎたる如く、眼は金の



八　山内一豐の妻

鈴をかけし如く如何にも名馬でありましたゆゑ、これを見た者は皆欲しいとは思ひましたが、何分にも値が高いので誰一人買はうと云ふ者がありません。馬の主は馬を引いて歸らうとしました、一豐も欲しくてほしくて堪らないが、如何とも致し方がない「貧は諸道の妨げ」とよく云ったものだ、彼れ位の馬に乘ることが出來ぬ位なら、寧ろ世を捨てゝ武士を廢める方がよいと思ひつゞけて家に

歸り「ア、金が無い程殘念な事はない、武士として彼の位の馬を持って見たい」と、思はず獨言を云ひました。妻はこれを聞き夫に向って「その馬の値は如何程です」と尋ねますと、一豐は「金十兩」と力無げに申しますと、妻は立って鏡箱の中から十兩の金卽ち現今の殆んど千圓程の金を持ち出して「どうぞこれでその馬をお求め下さいませ」と、白紙の上に小判を並べて差出しますと、一豐は驚いて「これは又どうした金か、これまで貧しい暮しをして居るのに、こんな大金を持って居るなら、なぜ有ると一言云はなかった」と且は喜び且は恨む樣に申しますと、妻は「このお金は私がこちらへ參ります時、夫の一大事の折に使へと申し、父が渡して吳れた金でございます、人の話によりますると御主人織田樣には近い内に、京都に於て天皇の行幸を申し請ひ、馬揃をして士卒の强弱を試みらるゝよし、定めし皆樣は御自慢の馬に乘って御集りのことで御座いませう、あなた樣にも其の折には良い馬に召して、主人の御目に止まる樣になされるのが大事と考へまして、今日此の御金を出しましたのでございます」と申しますと、一豐は大に悅び妻に禮を述べてその馬を求めました。やがて馬揃の日となって一豐の馬は果して信長公の馬にも打ち勝ちて見えましたゆゑ、其の感心斜ならず、小身者がよくも武道に心を竭し良馬を持ったのは實に神妙なりとて、三千石の御加恩がありました。其の後一豐は二萬石の領主となり、豐臣氏の時には遠州掛川の城主となり六万石の領主となりました、德川氏の代となりては土佐全國を領し二十四萬二千石となり子孫永く榮えま

九　袈裟御前

袈裟御前の御母様は名を衣川と申しまして遠藤武者盛遠の伯母でありました、盛遠は袈裟が男優りの才をもち容色人に勝れて居るものですから、どうかして妻に貰ひ受けたいと思ひ伯母に度々所望致しましたが「袈裟には既に源渡と云ふ夫があるゆゑ、氣の毒だがお前の望みは御斷り申す」と云はれても、一旦思ひ込んだ盛遠はなか〳〵これを忘れることが出來ません。或る時は伯母を脅したり或る時は賺したりして賴みますゆゑ、伯母も最早如何とも致方なく途方に暮れて居りました、陰に袈裟は此事を聞き込んで、これは困つた事が出來た、どうかして母様の御心を安めたいと、いろ〳〵と心を碎いて居りますが、今更ら夫を

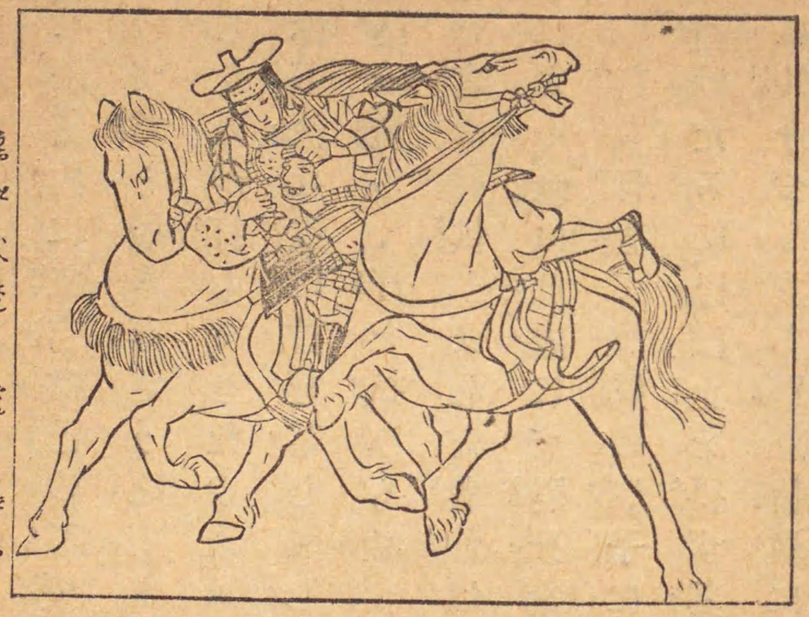
二人持つことは斷じて出來ぬ事であるし、さりとて此の儘にしておけば、何れ母様の御身の上に御難儀がかゝる、子として是を餘所に見て居られませう、斯る事の起るのも妾があるゆゑであると、獨り胸を痛めて居りましたが、そこは女の思慮の狹い所で自分が死にさへすれば事が濟むと思ひました。折よく盛遠が參りました袈裟は盛遠を別間に招き「卿の御親切の程は嬉しく存じますが、夫のある身でありますゆゑ、今まで御斷りを致しましたなれど、唯

一つ妾が願を叶へて下さらば、卿の仰に從ひませう」と云ひますゆゑ、盛遠は意外の話にホクと笑み「其方の云ふことなら必ず叶へて進ずから早く云ひ給へ」と膝を突出して尋ねますから、袈裟は重ねて「惡ひ事とは思ひますが卿の御手で我が夫を殺して下さいませんか」と申しますと、「それはいと易い事である渡さへ無ければ屹度私の望を叶へて下さるか」と念を入れて聞きますから、袈裟は「その念には及びませんさらばかくかく」と種々の手筈を決めて立ち分れました、やがて其刻限になりましたら盛遠は袈裟と申し合はした通り致して、難なく渡の寢所へ忍び入り首尾よく寢首を搔き落して、外に持ち出で月の燈で透かして見れば、こはそも如何に渡の首と思の外、現在自分が戀ひ慕つて居る袈裟御前の首でありました、流石戀に心を奪はれて居た盛遠も一時に迷の夢が醒めて僧となり、文覺上人と申されました。

一〇　巴御前

平家にあらざるものは人に非らずとまで稱へられ、榮華に誇つた一門も以仁王の令旨により、石橋山に於ける賴朝や、木曾の冠者義仲等の爲めに、哀れ西海の藻屑と變る有樣になつてしまひました、後白河法皇樣は義仲の功を賞して左馬頭に任じ伊豫守を賜りました故、京都に於ては旭將軍として其の勢に靡かないものはないやうでした。されど義仲は法皇と天皇擁立の事より意見を異にし、遂に其の怒に觸れましたので、却て不平を起し京都市中で亂暴ばかり致しましたゆゑ、法皇は遂に鎌倉の賴朝に命じて、義仲追討の院宣を下されました。そこで賴朝は弟範賴義

經を大將として兵を發しました。其の時丁度西に走った平家も兵を整へ京都を逆襲しようとして居たので、義仲は板挾みとなりましたゆゑ、一旦京都を退き東國に於て兵を募り、頼朝の軍に對さうと決心しました、時既に遲く範頼義經の軍は最早宇治勢多に迫って參りましたゆゑ、止を得ず義仲は此處で必死に防ぎましたが、武運拙なく、脆くも大敗を取って仕舞ました。連戰連敗全滅の姿となった義仲は、主從僅に七騎で三條河原に向ひました、所が畠山重忠の軍が追擊して來たので、退いては戰ひ戰って は退き、遂に風前の燈火の有樣となりました。時に義仲の軍より一人の若武者躍出で縱横無盡に敵を薙ぎ立て、勝に誇った畠山の軍を後へ後へと退かしむる有樣となりました故、重忠は大に驚いて、彼の豪の者は誰であるかと調べて見ると、義仲の愛妾巴御前でありましたゆゑ、重忠は「汝猪小才なり手取りにして吳れん」と馬を陣頭に進めて巴に近寄り引組まんとして鎧の片袖をムンズと摑みましたゆゑ、巴は馬の首を廻らして一鞭あてましたから其の片袖を破って馬は走り出でました。流石の畠山も其の機敏なる働きと大力のあるには驚きました。義仲主從は漸く西宮河原まで落延びましたが、巴は後に遲れましたゆゑ馬足を早めて參りますと内田家吉の軍に出逢ひました。内田は唯一人で巴に近づ



き己れから名のって斬ってかゝりましたが容易に勝敗が決しません。其内に家吉は巴の黒髪を握って手首に巻き、大刀を振りあげて首を搔き落さうとしましたから、巴は拳を固めて其利腕をしたたか打ちましたゆゑホロリと刀を落した。其の隙に家吉を捻ぢ伏せ、遂に首を落しました。鮮血の垂れる其首を小脇に搔い込み、流るゝ汗を拭ひもせず馬を早めて義仲に近附き家吉が首を實檢に供しました。義仲は巴に向ひ「天運は既に盡きしと思ふにより、余は此處にて討死をする覺悟であるが、汝は女の事故疾く落ち行きて、故郷の妻子に此の最後を傳へよ」と言やさしく申聞けたるに、巴は止を得ず其の命に從ひ盡きぬ別の涙を鎧の袖に絞りつゝ立ち別れ、信濃に歸り悉に敗戰の狀を物語り共に泣き伏したと云ふことであります。

一一　靜御前

靜御前と申しますは、もと京都の白拍子でありました。白拍子といふは、今の藝者のやうなものでありますが、その服裝は頭に烏帽子をかぶり、白い水干を著て腰に太刀を帶びまして、男の樣でありましたゆゑ、男舞とも申しました。客の座敷へ出て歌を歌ったり、舞を舞ふたりして、人々の座興をたすける務をするものであります。靜はこの樣な卑しい務をして居ます身分のものですが、その氣立が人すぐれてやさしく、行もまた正しく婦女子の鑑として耻しくない女でありました上に、その容貌が大層美くしいばかりでなく、歌ふ聲は鶯の囀づる樣によい聲を出し、舞ふ姿は蝶のヒラ〳〵と輕く飛ぶやうで當時の白拍子で其の右に出る

ものはありませんでした。義經は或る日彼れを聘んだ時其心を愛して自分の邸宅へ呼び入れました。當時飛ぶ鳥も落ちる樣な勢をもつて居た平家を追擊し、遂に全滅さした大功を負ふて居る義經は、梶原景時の讒言によつて兄頼朝の怒に觸れました。或る日頼朝は土佐坊昌俊に命じて襲擊せしめようとしたのを、義經は早くも見て取り昌俊を捕へて詰問しますと、昌俊は一時を辨疏しますによつて相手にするに足らぬとて放ち還しました。義經は其の夜昌俊が攻入るに相違ないと思ひましたゆゑ館の者共を嚴重に誡めて置きました所、果せるかな六十餘騎を率ゐ鯨波を揚げて押寄せました。義經は小才なる昌俊めと刀をおつ取り立ち上り、片端から鏖殺しにするとて、駈け出さうとしました所を、傍に居られた靜は、其の裾を捕へ「敵は小勢だと申しても

侮り給ふな、輕はづみして一生を危ふくなさいますな」とて少しも狼狽をせず甲冑を取り出でゝ著せさせました。それで主從僅かに七騎ですが激しく防ぎましたため敵は散々に打負けて遂に敗走してしまひました。頼朝は之を聞いて烈火の如く怒り直に大兵を發して義經を追討さすることゝなりました。義經は骨肉の兄を敵とする樣な不人情ではありませんでしたゆゑ、一先づ京都を落ち兄の心の解けるまで己れの身を匿さうと決心して靜に其由を言ひ含め母の許に留まる樣諭しましたが、御伴をして御身を守るとて容易に聞き入れませんゆゑ、止を得ず連れて參ることに致しました。主從僅に七騎で此處に隱れ彼處に遁れして、大和地方に參りました時に、無慙や靜は山僧の爲めに捕へられ、鎌倉に送らるゝ樣な悲境に陷ってしまひました。頼朝は

静を呼び出し、面前に於て義経の落先きを訊問致しましたが、唯知りません、存じません、の一點張りで押通しましたが、静は姙娠の身であることを知りましたゆゑ、京都へ歸ることは許しませんでした。或る時頼朝は鶴岡八幡に參詣し神前で静に舞へと命じました。静は舞どころではない、義経の身上ばかり案じて居る處ですから、泣いて謝絶はりましたが、頼朝はどうしても承知しませんゆゑ、詮方なく起ち上ることゝなりました。工藤祐経は鼓の役、畠山重忠は銅拍子の役を務めました。静は堪え切れぬ樣子で沈んだ聲で、「吉野山、峰の白雪、ふみわけて、入りにし人の、あとぞ戀しき」、又續いて、「しづやしづ、しづのをだまき、繰返し、昔を今になす、よしもがな」。と歌って切なる心中を言ひ表はし、涙を拂ひながら舞ひました。ところが頼朝は其の歌を聞いて以ての外に怒り斬って捨てようと致しましたら夫人政子が静に同情して諫めましたゆゑ、漸く事がをさまりました。月經て静は男兒を分娩しました。其の後可惜花の盛の静は黑髪を切り落して嵯峨の奥なる天龍寺に庵を構へ義経と亡子を吊ひ老母に孝養を盡しました。

一二　北政所

北政所は豐臣秀吉の夫人であります。妙齡のころ既に智慧深く才氣に富み容貌も人並優れて居りました故、信長の臣前田犬千代は夫人を娶らうと思って、其邸に行き自ら夫人の父淺野長勝に向ひ、「御息女を貰ひ受けたい」と申込みしました所が、長勝は一

も二もなく承知致しましたが、念の爲め本人の意嚮を確めてから御挨拶をするとて歸へして置いて直に夫人の心を聞いて見ました。地位もよし好男子である犬千代の妻となることだから、喜んで承知するならんと思って居ましたら、豈に圖らんや厭やだと云ひます。如何程勸めてもどうしても諾きません。長勝は殆んと當惑して娘が不承知だと云へば、犬千代の身分が不足だと云ふことになる、如何致したらよからうかと考に沈んで居ると、丁度其處へ

木下藤吉郎が來ました。之れ幸と相談して見ると藤吉郎はそれは御困りでせう。併し御斷りなさるのは容易い事です。私と御息女と最早婚約が成立って居ると云ったら、先方では夫れでもとは申すまいと教へて呉れたので、長勝は別に良い策も出なかったものですから、藤吉郎の言葉の通り、犬千代に斷りました。犬千代の方では斷られるとは、夢にも知らなかったばかりでなく、人もあらうに猿面冠者の藤吉郎と婚約が出來て居るとは受取れない。之れは口實ではあるまいかと思ひましたゆゑ、其の後藤吉郎に逢って、其の事を訊ねますと全くさうである。疾に婚約が出來て居るといふことであるゆゑ、自分は大に氣持が悪い、何とかして困まらしてやらうと、日頃意地の悪い犬千代の事ですから、「それでは善は急げだ自分が媒人の勞を取るから、一日も早く婚

禮の式を擧げたらよからう」と云ひます故「何分宜しく賴む」と申しました。犬千代は其足で長勝の邸へ參り藤吉郎と息女との婚禮の式を早速擧げらるゝ樣になさい。私が媒人になります」と云ひますから、長勝はこれはシマッタ、先にあんな口實を設けて斷らなければよかったと思ったが、如何とも致方がない、娘が木下の如き身分も卑き猿面冠者の處へ嫁ぐことを承知する筈はないと、心配しながら、娘に話しますと、女は「藤吉郎は醜夫でもあり、身分低きものではあるが、將來見込のある人物ですから、彼の人の處なら自分から願っても參りたい」と答へました。長勝も一理ある話しであるし、又當人の望とあらば致方ありませんゆゑ、藤吉郎を呼寄せ其事を話すと「貧乏の私で宜しければ御息女を貰ひ受けませう」と承諾致しましたゆゑ、吉日を撰んで御輿入れといふことになりました。其の後藤吉郎は次第に信長に信用を得益々出世をして遂に一方の旗頭となり、到る所の戰爭に勝って、飛ぶ鳥も落ちる程の勢となりました。或る年毛利氏を征伐する爲めに中國に趣いて居る留守中に信長は光秀の爲めに弑せられましたによって、直に毛利氏と和睦し、急ぎ歸て主君の仇を報いた爲めに、天下は全く秀吉の手に落ちることゝなりました。秀吉其の人は世に稀れなる人物でありますゆゑに、斯く成効したのでありませうが、又夫人の内助が預って力あったことでございませう。

一三　加賀の千代女

千代女は加賀國松任驛福增屋六兵衞の女であります。幼い時か

ら風雅の心があって、或る時師匠もないのに俳諧を上手に作りましたゆゑ、父母はこれほど志のあるものを其の儘にして置くのは本意でないとて行脚の僧の來たのを幸に家に留めて學ばせました。又畫は吳俊明と云ふ人に就て學び、これも優れた筆を執る樣になりました。或る人から「畫を上にして、賛を下にかいて下さい」と望まれましたゆゑ、千代女は牽牛花の垂れた所を上に畫き其の下に

朝貝や地に咲くことをあぶながりと書いて人に褒められました。十八歳の時に金澤の福岡某へ嫁ぎました時に

澁かろか知らねど柿のはつちぎり

又子を生んで其の子が幼くして死んだとき

蜻蛉釣今日はどこまで往たやら

とよみました。不幸にして夫が早死を致しましたから、松任に居る父の家に歸り益々俳諧をたのしみ、二十三歳の時に京都に上り伊勢に行って麥林舍乙由と云ふ俳諧師の門人となり、二十七歳の時再び京都に上り其後は歸國致しまして一生を俳諧に終りました。千代女は容貌は優美な方で言葉寡く常に漢籍を好み畫を能くしましたから、松任は北陸道から京都へ往來の路に當

りますので、諸國の旅人が此處に立寄り逗留して書畫を乞ふものが多かったものですから、其の頃到る處に其の名を賞揚されました。安永九年九月八日七十四歳で永眠されました。此の方の名句に

田の草はぬきてそのまゝ田のこやし

一かかへあれど柳は柳かな

起てみつ寢て見つ蚊帳の廣さかな

朝顔に釣瓶とられて貰ひ水

眞すぐにうつむくばかり百合の花

あさがほの其の日其の日の花の出來

千なりも蔓一筋の心より

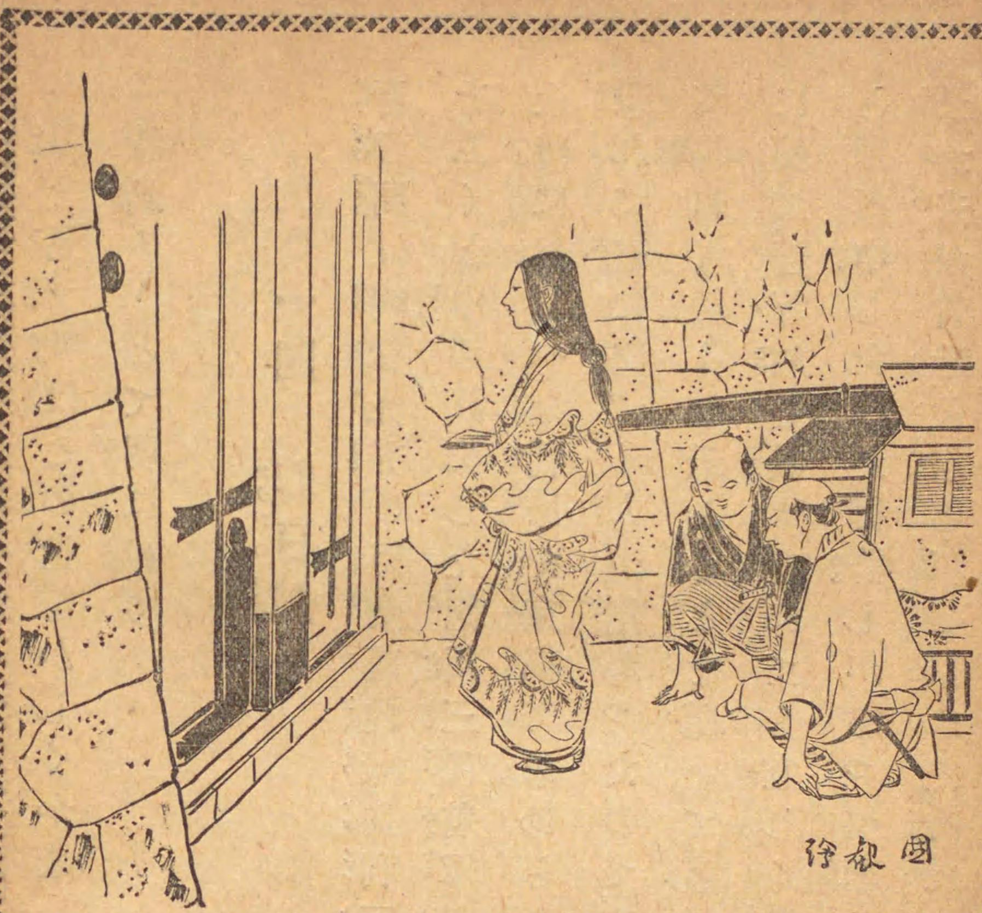
いくたびか御手にかゝりし菊の花

月を見て我はこの世をかしくかな

時鳥〳〵とて明にけり

一四　春日局

春日局は明智光秀の臣齋藤内藏助利三の女でありまして、幼名をふくと申されました。德川三代將軍家光公が御誕生遊ばされた時に然るべき乳母を京都で求められましたが、誰も皆關東を恐れて召に應ずる人が無かったので、京都の粟田口に立札をして尋ねて居ると云ふことを聽いて、直に上京し板倉伊賀守勝重に就て、吾等如き賤き者にても宜しく候はゞ關東へ罷下るべしと御願申した所が御許しがあって參ることゝなりました。家光公が未だ竹千代君と稱せられた時に、御臺所にはさして愛せら



國政作

れず國松君の方を御寵愛でしたから、自然と威光が盛んで兄君の權勢が衰へましたから、春日局は深く歎いて竊に伊勢大廟へ參詣をして歸りに駿府に立寄り、御子樣方の樣子を委く家康公に申上げられました。すると其の後家康公は鷹匠の遊をなさるるとて江戸に參られて、竹千

代を世嗣と定むべしと命ぜられました。是れはよく春日局の抜參と申して名高い御話でありません。局は或る時平川口の御門を通行される時に本丸の目附役が門を開きませんので「春日である」と名のりましたに、番頭初鹿野傳右衞門と云ふもの、「春日でも天照大神でも御通し申すことはならぬ」とて許しませんでしたゆゑ止を得ず、局は川風に吹かれて二時ばかり待つて、漸く門を通ることが出來ました。局は其由を逐一家光公に申し上げますと公は「門の出入は堅く命じ置く故左もあるべし」と申されました。局は將軍の御威光斯樣にも能く及べるかと感涙を催され翌日御菓子を平川口番所へ贈つて其勤勞を慰められました。箇樣な御方ですから家光公も局を出來得る限り厚く待遇し、寛永六年十月に京都に御上りになつて明正天皇樣に拜謁を許され天

盃を下され、春日局の號を賜はり、從二位に叙せられました。

一五　原總右衛門の母

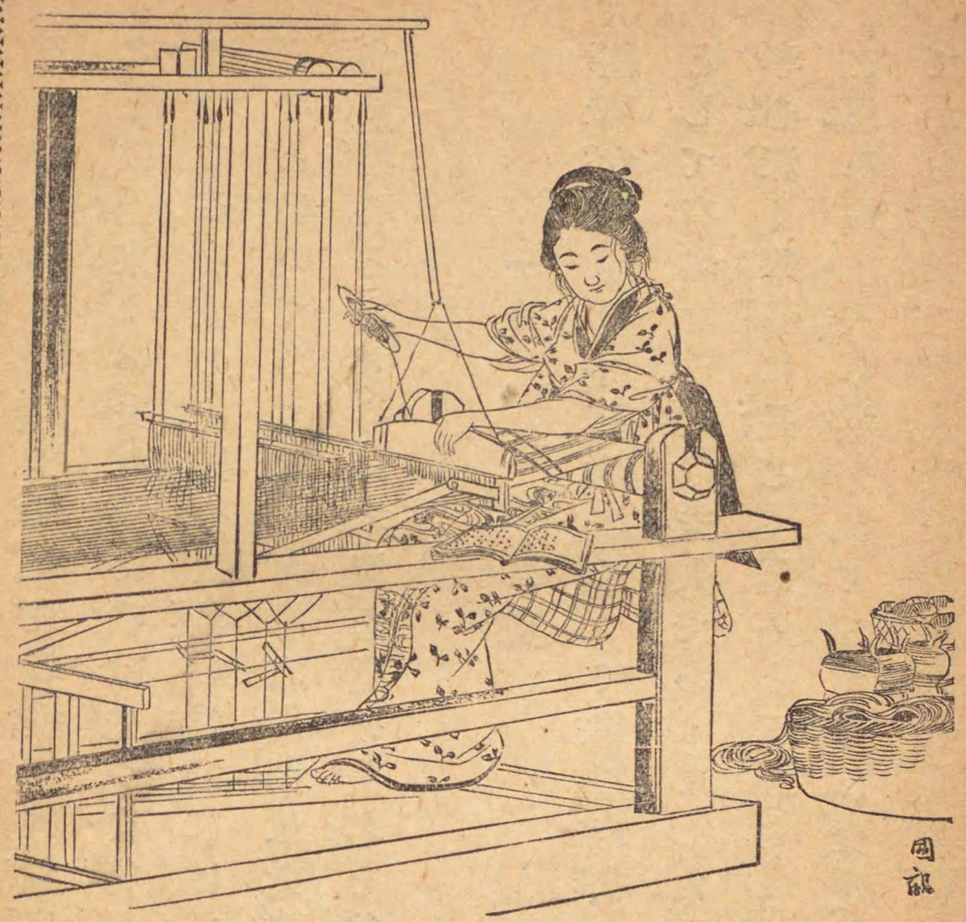
赤穂の四十七士が苦心慘憺して首尾よく主君の仇を討ち、日本武士道の光を添へました其の裏面には、血と涙とにて彩られた悲慘なことが澤山あります。原總右衛門は主家滅亡後も城下赤穂に住で居まして、度々大石良雄の住居なる京都山科へ往來をして窃かに復讐の相談を致しましたが、此の事は肉親たりとも打明けることはならぬ約束になって居りますゆゑ、母にも極々秘密にしておくびにも出しませんでした。愈々復讐の時機が迫って來ましたから或る日總右衛門は母に向って「私は近日遁れ難い用事があって京都へ參りますが、又都合によっては江戸へ

趣くかも知れません、何卒暫くの間御暇を下さるよう」と語りますので、母は靜に形を正し「御前は今度江戸へ行かれると云ふのは、正しく主君の讐討をされるのであらう、祖先より受けた主君の御恩を忘るゝことなく一命を擲て之れに報いる樣にし能く〳〵心を用ゐて人に後れを取らぬ樣になされよ」と懇に諭されました。總右衛門は心の中では悲さに堪へませんでしたが左あらぬ體に母を慰め京都を指して出發しましたが、大石良雄は折惡しく病氣

の爲めに江戸へ下ることは暫く延びる事となりましたから、總右衛門は一日たりとも母に孝養を盡さうと思ひ再び赤穗に歸りまして、母に「少しく用事の行違ひにて江戸に下る日限が延びましたゆゑ一先づ歸宅致しました」と云を聞いて、母は默然として居ましたが、其の夜は常になく酒肴を調へて勞ひ、自分も快く酒酌交して臥床に入りました。翌朝總右衛門は何時も早く起き出でられる母上が今朝は何故に遲いのかと不審議に思って母の部屋を覗いて見ると這は抑も如何に、母は自害して此の世の者ではありません。總右衛門は驚いて傍に寄って見ると一通の遺書がありましたから涙ながらに開いて見ると「汝が京都へ出立するをり能く申附けたる如く忠孝は二つながら全ふすることは難いから此の母を心に掛けず主君の仇を報いよと諭したのに母を慕ふて再び歸り來る樣では、到底一大事を爲し遂ぐることは覺束ない。夫れ故に我は先づ自害して汝に忠義を勸めるのであるぞ。彼の上野介は汝の爲めには君の仇、又此母の仇であるぞ」と書いてありました。總右衛門は此書を見ると同時に心は尙々鐵石となり、終に本懷を遂げ美名を後世にまで殘しました。

一六　紅蘭女史

紅蘭女史は梁川星巖と云って德川時代に詩人として又勤王家として有名なる人の夫人でありました。初め星巖先生は女史が孝心深く學藝に長じて居ると云ふことを聞き行末頼もしき者と思ひ、或る人の媒介によって貰ひ受け、目出度結婚を致しましてから未だ二月とたたない內に、星巖はフイと旅行に出掛けま



國貞

した。家を出る時に三體詩の本を與へて「私は暫く旅行して來るから留守を賴む、私の代りに此の詩の本を渡して置くから淋しいと思ったら是を御讀みなさい」といって出て行きました。勿論何時頃歸るのだか分らず行く先も語らず、婚姻後僅二ヶ月立つ

たばかりですから一夜の留守も千秋の思ひが致しますのですが、親に孝なるものは夫にも貞節なもので、それより毎日機織をする傍に三體詩の本を置いて熱心に讀み、遂に悉く之れを暗誦して、只管星巖の歸りを待って居りましたが、梨の礫で何の音信もありません。一月二月は瞬く間に暮しましたが未だ歸りません。半年經ても一年經ても二年經ても矢張り歸りません故、女史は堪へられぬ程淋しくなりましたが凝と我慢をして、三體詩を讀み氣を紛らして居りました。女史の兩親は「お前の夫は旅行して出て行ったきり、死んだとも生きて居るとも、何とも沙汰が無い、最早待って居ても其の甲斐はないから年を取らぬうちに他へ嫁入してはどうだ」と勸めましたが、女史は夫の旅行が永引くからと云って離緣して實家に逃げ歸る樣な志の弱い女の德の

缺けた方ではありませんでしたゆゑ、女史は「一度緣附いた上は夫が生きて居られようが又不幸にして死なれようが再び他に嫁入りする樣なことは出來ません。今にも夫が歸って來るかも知れませんゆゑどうぞ御待ち下さい」と云って更に心を動かしませんでした。丁度三年目の秋紅葉が野や山を彩る頃、星巖は九州長崎から歸って來ました。女史の喜びは例へ樣がありません、其の日は心を籠めた料理を拵へて旅の疲を慰め、彼の三體詩を悉く暗誦して聞かせましたら、星巖は大に驚き、且非常に悅びました。女史が後に能く詩を作る樣になったのは、此本を暗誦したのが本であります。其の後女史は家事に能く勉め常に質素を旨とし儉約を守り又傍ら良人に就いて學問を勵みましたゆゑ、文章も能く綴り畫も巧に描き又詩に妙を得まして後世に至るまで女子の鑑と仰がるゝ樣になりました。

ほまれ(花の巻)終

267
643

明治四十五年三月十三日印刷
明治四十五年三月十五日發行

著作權所有

著作者　教育研鑽會
發行者　東京市神田區昌平河岸四號地　前川一郎
印刷者　東京市神田區松下町七番地　横田五十吉
印刷所　東京市神田區松下町七番地　横田五十吉
發行所　東京神田昌平橋　學海指針社
振替貯金口座三〇二三

學校長氏名	受持訓導氏名

明治　年　月　日受賞

學年	第學年

兒童住所氏名